朝日旧友会報

朝日旧友会
東京都中央区築地五―三―二
朝日新聞東京本社内
〒104―8011
TEL 三五四五―〇一三一
FAX 三五四三―三三二八

挨拶する中江会長
左から加納安實選考委員長、大野、徳江両副会長、木村社長、宮田東京代表

定時総会にぎやかに開く

懐かしの仲間元気に再会

東京朝日旧友会の平成二十五年定時総会は、五月二十三日（木）午後四時から有楽町マリオンの朝日ホールで開かれた。半年、一年ぶりに懐かしい昔の仲間と再会出来るとあって、午後一時半からの映画「北のカナリアたち」上映前には約百八十人が詰めかけにぎわった。会場のあちこちでは「やあ、しばらく。お変わりなかった。元気でなによりだ」と抱き合ったり、手を取り合う場面がみられた。

総会は中江利忠会長、徳江景英、大野功雄両副会長、加納安實選考委員長はじめ会員二百三十人、本社側から木村伊量社長、宮田善光東京代表や役員、幹部三十五人が出席、盛大だった。

先頭に立ち危険性に歯止めを　中江会長

厳しい時代続くが旗は守る　木村社長

総会は森精一郎事務局長の司会で開会、まず中江会長が「安倍政権に国民的監視を」「求められる歴史的大局観」と題して会員に語りかけ感動を呼んだ。その中身としてわが社OBから贈られた「注目の書三冊」を紹介した。

その注目の書とは船橋洋一・元主筆書き下ろしのドキュメント「カウントダウン・メルトダウン」また船橋さんが関係する財団法人「日本再建イニシアティブ」の緊急レポート「日本最悪のシナリオ　9つの死角」。さらに天声人語の筆者高橋郁男さんがまとめたエッセー「渚と修羅　震災・原発・賢治」で、時々刻々動く世相を正確に判断「朝日新聞がメディアの先頭に立って政治の危険性に歯止めを」と訴えた。

次いで森司会者がこの一年にご逝去された七十六人のお名前を拝読、全員で黙祷を捧げた。加納選考委員長から役員、幹事の選考経緯の報告、森下会計幹事から平成二十四年度の決算報告があって拍手で承認された。

来賓として出席の木村社長は「目の前に消費増税など大きな問題が立ちはだかっている。ジャーナリズムの旗を守って、厳しい時代は続くが、朝日新聞を引っ張ってひるむことなくゆく――」と決意を語って満場の拍手を受けた。終わって懇親会。タル酒が開けられ、ホール全体が一気に盛り上がった。会員同士の語らいは夜八時過ぎまで続いたが、名残りを惜しみ、次回の再会を約束して帰路についた。皆様お元気で、またお会いしましょう。

平成二十六年度総会日程

［日時］新年総会　一月十六日（木）
定時総会　五月十五日（木）
［場所］朝日新聞記念会館（有楽町マリオン11階）

安倍政権に国民的監視を求められる歴史的大局観

東日本大震災二周年とともに二人の朝日新聞OBから送られて来た注目の書三冊を紹介することから始めたいと思います。

元主筆、船橋洋一さんが書き下ろしたドキュメント『カウントダウン・メルトダウン』、彼が理事長の財団法人「日本再建イニシアティブ」でまとめた緊急レポート『日本最悪のシナリオ　9つの死角』、そして元「天声人語」筆者、高橋郁男さんが著したエッセー『渚と修羅　震災・原発・賢治』の三冊です。

大震災二周年に注目の三冊

船橋さんの呼びかけで大震災の直後に発足した日本再建イニシアティブが一年後に民間唯一の総括レポートとして「福島原発事故独立検証委員会調査・検証報告書」を発表したのは記憶に新しいことですが、そこで露呈された危機の時々刻々の経過と真相を、一記者に戻った内外の追加取材で深めながら綴ったのが『カウントダウン・メルトダウン』です。

事故直後に現場から逃げてしまった原子力安全・保安院の検査官。原子力安全委員長が「絶対ない」と言い切った直後に起こった水素爆発。合計十機の原子炉が吹っ飛び首都やアジア全体に被害が及ぶ、という最悪のシナリオやその場合の「総理大臣談話」まで準備、などの事実を明るみに出しています。

こうした「国の形」のメルトダウンを体験して、日本を襲う「想定外」の国家的危機を大津波や原発事故に限らない「9つの死角」として列挙したのが『日本最悪のシナリオ』の本で、最初の「尖閣衝突」の項目は次のような内容になっています。

中国が東シナ海から日本海、太平洋に至る大規模な演習を陽動作戦として展開、台湾とも共闘しながら尖閣諸島の魚釣島に漁民風の約三十人を上陸させて小型ケース状のものを陸揚げ、日本は警察、海上保安庁がもたついた挙げ句、自衛隊を同島に上陸させて排除にかかる。すると中国は「日本が先に軍を出して民間人に危害を加えて来た」と外交の舞台で非難、日本が外交協議に入ろうとすると中国側は「尖閣に対する中国の主権を認めることが前提」として協議は実現せず、一カ月後には小規模な部隊が宿泊できる簡易施設も完成して実効支配されてしまう、というものです。

最悪の9つの死角シナリオ

このほか国債暴落、首都直下地震、サイバーテロ、パンデミック（感染症の世界的流行）、エネルギー危機、北朝鮮崩壊、核テロ、人口衰弱という八項目の「死角」が取り上げられます。

そして課題として①危機に臨機応変に対応できる訓練、人材育成と法制度の改善②リスクに対する適応・復元力や自助努力を高めるための官民協調③地政学的リスクを認識して情報収集や戦略的なコミュニケーションを強化する対外戦略④官邸の横断的、戦略的な情報の収集・分析・発信ができるような日本版NSC（国家安全保障会議）の創設、などを提案しています。

船橋さんはこの『シナリオ』の後書きで、日本政府に求められるリーダーシップを定義して「危機の本質を察知し、それを国民に伝え、その対応の優先順位を示し、それを行動に移すためにすべての国家的資源を統合、動員し、それに対する国民的合意を維持することである」と結論づけました。

中江旧友会会長あいさつ

賢治が残した「慢」の教訓

一方、高橋さんの『渚と修羅』は、まず大震災を東京の自宅の書斎で経験した場面から始まります。一番古かった木製の本棚が崩れて数百冊の本が雪崩を打って床に扇型に広がり、宮沢賢治の全集の上に他の作家の著作集が重なったりして床の上に作家たちの「渚」が現れ、テレビでは太平洋岸の渚が修羅場になりつつあった、と記しています。

またその四年前の二〇〇七年、東電が原子炉の緊急冷却装置の故障を隠して国の定期検査をやりすごしていたことが明らかになった時、自ら「天声人語」に書いた一節を再録します。

「人類は、今もって原子力を制御しきれていない。それを肝に銘じ、経済性などに引き回されることなく、慎重なうえにも慎重に相対すべきだ。偽ったり、過小評価したりしていると、いつの日か大災害を起こすことになりかねない」

そして日本で初めての、遠い未来の世代にまで悪影響を及ぼす原発による「四次元災害」の傲慢さを、三陸津波を経験していた宮沢賢治が亡くなる十日前にかつての教え子に送った手紙にある「今日の時代一般の巨きな病、『慢』というもの」に重ね、「より安全・安心な世界を求める新しい波の渚」に再生されることを訴えました。

「強い日本」を目指す危険性

そんな中、安倍首相は「アベノミクス」延長の形の各国歴訪で、原発の輸出を強行しつつあります。トルコでの会見で首相が語った「過酷な事故の経験と教訓を世界と共有し」という言葉がいかに空々しいものかは、強弁された事故の「収束」とは裏腹に、故郷を追われた避難民がいまだに三十万人を超え、現場で原因不明の大規模な汚染水事故が頻発している現実を挙げるだけで、十分でしょう。

さらに安倍首相は「強い日本」を取り戻そうと、憲法九条改正・国防軍創設のハードルを低くするための九六条の改正という立憲国家への反逆に走り出し、閣僚の靖国参拝に中韓が反発すると「どんな脅かしにも屈しない」と開き直り、日本の侵略と植民地支配を反省しおわびした「村山談話」や、従軍慰安婦に強制力を認めた「河野談話」も、反古にしそうな言辞を弄しています。

その後、橋下大阪市長による過激発言の波紋の中で「村山談話」は「全体として受け継ぐ」と答弁せざるを得なくなりましたが、平和と共生を軸とした二十一世紀の歴史的大局観に反する安倍政権の言動が、いつまたぶり返すかも知れません。

朝日新聞の世論調査による安倍内閣の支持率は六五％で、過去の短命な内閣と違いほとんど下がっていませんが、これは、長いデフレからの脱却を求める国民が少しでも新政権に望みを託しただけの結果だといえます。別の世論調査に表われた九六条改憲反対五四％などの結果を見ますと、大震災を契機に高まった「日本再生」機運の方向が誤らないように、朝日新聞を先頭とする良識あるメディアが安倍政権の危険性に対する国民的な監視と歯止めに入る時期が到来した、と思わざるを得ません。

そこで旧友の私たちは、現役陣のキャンペーン強化の動きに共に手を携えて、頑張ってゆきたいと思います。

社長あいさつ

社業報告する木村社長

あすのために変えるべきもの変える
いまこそ殻を突き破る革新の気風を

昨年六月に秋山耿太郎前社長、現会長からバトンを受ける形で社長に就いて、一年です。おかげさまで、大きな経営の落ち込みもなく、なんとか地に足をつけたスタートが切れたかなと思っています。これも、現役のみなさんの奮闘のたまものであり、同時に、旧友会のみなさまからのご支援あってのことと、心から感謝をしております。もっとも、目の前には消費増税が迫っております。こうした大きな問題への対応などもあり、ひと息ついているわけにはいかない毎日です。

二〇一二年度の本社営業利益は六十四億円に達し、二〇一一年度の三十九億円に比べると大きく増えました。編集費や販売費などの支出を減らす努力を続けたことや、新聞用紙、インクといった現材料費の値上げをなんとか抑えられたこと、社員の退職にかかる費用が減ったことが主な要因です。広告の収入は、広告部門の皆さんの奮闘によって前年度をなんとか上回りました。これは八期ぶりのことです。しかしながら、国内企業の広告需要の冷え込み、インターネットの台頭による広告媒体の多様化といった構造的な要因が重なります。販売部門でも部数調整等の努力もあって、かなり合理化は進んでおりますが、それとの裏返しで、新聞代収入は減っています。いま、全社の朝刊の部数は七百六十二万部、夕刊は二百七十八万部というところです。人口減、若い世代を中心とした新聞離れも加わって、購読の落ち込みに歯止めがかからないなかで、販売部門は全国のASAとスクラムを組みながら懸命の努力を続けている最中です。

来春、消費税三%の増税が待ち構えています。二〇一五年十月にはさらに二%アップして十%に引き上げられます。もちろんこれは本体価格の値上げではありませんが、消費者の財布のひもがなかなか緩くならないなかで、セット版の価格が四千円を超えるならば「これをきっかけに購読をやめよう」という人がどれくらいになるのか。そこを慎重に追求しながら、販売局を中心に対策を講じています。

失敗恐れず「知の溶鉱炉」活用

五月七日にニュースやブログ、ソーシャルメディアを融合させた、全米で最大のアクセス数四六〇〇万人を誇るニュースサイト「ザ・ハフィントン・ポスト」日本版をスタートさせ、ネット上で良質な意見を交わし合う、質の高いオピニオンフォーラムづくりを始めました。

ほかにも、朝日新聞記者がソーシャルメディアを利用して読者と双方向のやりとりをしながら紙面を作っていく「ビリオメディア」などの企画、また、本紙が認めた七十人ほどの記者個人個人が発信して読者とつながっていく「記者ツイッター」なども軌道に乗せています。

「メディアラボ」も誕生させました。朝日新聞の未来を担う新たな商品開発や事業展開に向けて、社内外の若い活力を注ぎ込んで自由闊達に議論してもらう、いわば「知の溶鉱炉」です。失敗をおそれることはありません。最終的な責任は私が負います。いずれ、思いもよらない果実を生み出してくれると期待しています。

最近の紙面で、私の感じたところを二つお伝えします。ひとつは、アベノミクスと、これに呼応した黒田マジックの異次元の金融緩和です。アベノミクスによって、日本の経済は劇的な変化を遂げつつあるように見えます。不動産業や建設業、自動車などの輸出産業はそろって業績をV字回復させています。

こうした急速なリフレ経済策には、当然のことながら強い副作用が伴うことを忘れるわけにはいきません。国債の長期金利が上がってやがて国債が暴落し円の信用が落ちて、それこそ日本経済が奈落の底に転落するような危険は本当にないのだろうか。経済と財政の行方をチェックしていくことこそが朝日新聞の役目であろうと私は考えています。

もうひとつは憲法です。これは私の個人的な感想ですが、憲法はけっして不磨の大典ではない。護憲、護憲と百万回唱えれば平和が保証されるわけでもありません。ただし、あの無謀な自爆戦争のあげく国内外に惨禍をもたらし、幾多の尊い命を奪ったことへの痛切な反省に立ち、二度と軍靴で他国を踏みにじるようなことを繰り返してはならないという不戦への決意を込めて手にしたのが今の憲法だと考えます。

ジャーナリズムの旗守る

いま、この時点で憲法を変えて、どんな国と社会を目指すのか。国民を国家の意思と道徳に屈服させるかのような自民党の改正案は大いに疑問と言わざるをえません。まして、96条改正、からめ手からの改正の動きに私は反対です。五月三日の憲法記念日の社説をお読みいただいたでしょうか。変えていくことは変えていこう、しかしながら、戦後日本が断じて変えてはならないことは守り通していこうという明確な主張でした。私はこの憲法社説を百%支持するものです。朝日新聞は、きりりとした、ジャーナリズムの旗を立てて、これからの重大な場面に立ち向かっていかなければなりません。

旧友会のみなさまにご関心をお寄せいただいている年金改革について、現状を説明させていただきます。

現在の受給者の中には五・五%の方と三・五%の方が混在しています。五・五%の方の引き下げについて、OBのみなさまのご意見をうかがうため、本社は今年二月から三月にかけて、アンケートを実施させていただきました。送付した半分ぐらいの方から回答が寄せられ、多くの率直なご意見やご要望を頂戴しました。この機会に、心より御礼を申し上げます。事務局の現時点でのまとめによりますと、五・五%の方のうち、いまの会社の状況、現役諸君の苦境を考えると会社に協力してもよいという方は約六割だったそうです。OBのみなさまの年金を最終的にどうするのかは、基金の状況などをみながら検討していきます。

いま私は全社員に向けて、繰り返し「朝日の殻を突き破ってほしい」と訴えています。変えてはならないものは頑固に守る。しかし、変えるべきものは勇気をもって変えていく。厳しい時代の朝日新聞を引っ張るものとして、全身全霊をかけて朝日新聞の針路に誤りのなきよう、朝日新聞がジャーナリズムの首座としてこれからも長く存続していく基盤作りに邁進していくことを改めてお誓い申しあげます。

旧友のみなさま方には、引き続きのご支援、そして、ときには厳しいご叱声を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年　定時総会出席者

会員出席者

（あ）荒木忠直　青山　勇
秋庭武美　秋山　明
秋山康男　安部光俊
天野重夫　荒木信義
荒田茂夫
粟田伊三雄　安藤保雄
（い）飯田正美　壱岐健志
池田正勝　池田　守
石井哲次郎　石川喜代司
板垣　誠　板津直成
伊東鈴男　伊藤　壯
稲永金仁　井上日雄
飯野幹雄　岩井　章
岩井弘安
（う）植木　栄　上田久行
宇野勝己　梅本洋一
（お）大野功雄　大坪　正徳
奥川恭子　大倉文雄
大塚一郎　大原広哉
岡田和巳　岡部匡克
奥田信久　岡村　徹
小田川興　小野寺忠志
（か）春日廣之助　片岡久明
片山朝雄　勝浦　章
香月浩之　加藤嘉照
加藤次一　加藤光雄
叶内　均　金子良三
金子晃二　金子　満
加納安實　蒲田浩二郎
亀本泰夫　軽部　平
川島正治　川瀬智長
川戸弘次　川原基尚
川辺久信　川又健一
（き）菊池　武　喜久村繁
岸　栄輔　岸田隆秀
清時竹彦
（く）久保田泉　窪田康孝
栗田直次郎　栗原裟哉
（こ）高口信行　小勝竹雄
小杉　弘　児玉浩憲
後藤清光　小林淑郎
小林　功　小林三千夫
五味秀雄　込山光雄
小山千宏　紺谷安弘
（さ）坂井清保　斉藤幹雄
斎藤善男　坂巻　武
笹井輝雄　佐々木博志
佐藤　博　沢野正明
（し）志賀　浩　柴　昭二
柴田琇一　柴田眞樹
島戸一臣　清水　勝
志村和雄　下山　勝
（す）菅原道久　杉谷隆司
鈴木聞二　鈴木益民
（せ）須田　徹　須藤典政
仙名　紀
（た）竹内實昭　田中右太生
高垣徹蔵　高橋健治
高橋清太郎　高山修一
滝下　修　詫摩俊一
竹田　純　竹村文雄
田中健一　田辺　功
谷　久光　谷口富喜男
田谷宣夫
（ち）千綿雅夫
（つ）辻　徹哉
（て）寺田眞文　寺田達雄
（と）徳江景英　戸引和夫
東　常道　徳永哲哉
利根澤正弘　都丸　司
豊田　明
（な）中江利忠　中島　泰
名倉正昌　中島富治
中沢勝巳　中島清成
中島善範　永田芳男
中野義次正　中村雅俊
（に）西井哲郎　錦織正文
西村　誠　西脇　勝
蜷川真夫　二本柳典彦
（の）野地一也　信澤秀男
（は）畠山弘道　灰野　檀
長谷川敏郎　林　荘祐
林　常蔵　林　信晴
（ひ）菱沼幸次　平賀義男
平野新介
（ふ）藤巻　隆　福井正行
福岡照夫　福田喜大
古田捷宏
（へ）別府次郎　別府伸治
（ほ）本多民明　星野富榮
洞口和夫　堀　鐵藏
堀越作治
（ま）牧野詔正　前原寛成
牧野信彦　松　功
松井　茂　松本秀男
松本精次
（み）水木初彦　三浦義晴
三浦昭彦　溝部忠増
峯岸久雄　三野孝文
宮内　繁　三宅勝喜
宮坂秀一　宮崎千勝
宮崎　仁一
（む）村野　坦　宗田文隆
村岡美佐男　村上吉男
村田歓吾　村山朝夫
（も）森精一郎　森下　昇
諸　寿子　森　修二
森田恭生
（や）山越英一　山村行志
八代　義治　柳泉俊介
山崎有一郎　山﨑悦孝
山田　弘　山野辺富士雄
山内幸夫　山本久二男
山本祥之
（よ）横田稲光　吉川　宏
（わ）若目田倫子　和井田祐三
渡辺興博　渡辺恒雄
渡辺　登　渡邊　宏
渡辺幸男

ご寄付

▽ありがとうございました。

溝部忠増様　一万円
中江利忠様　五千円
粕谷卓志様　五千円

会計報告を承認

平成二十四年度の決算を森下会計幹事が報告、満場の拍手で承認された。決算報告は次の通り。

平成24年度　決算報告書

（平成24年4月1日～平成25年3月31日）

（単位：円）

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	8,175,723		
終身会費　(28名)	1,120,000		
年度会費　(28名)	112,000		
総会会費(2回506名)	2,530,000	総会費	4,565,799
総会寄付金（本社ほか）	4,210,000	会報費（年3回発行）	2,156,743
会報収入	252,500	供花費	476,700
協力会社寄付金　(25社)	1,500,000	会務費	3,718,580
その他寄付金	17,000	通信・事務用品・雑費	312,982
雑収入	2,768		
		次年度繰越金	6,689,187
計	17,919,991	計	17,919,991

役員・幹事執行部決まる

中江会長　徳江・大野両副会長留任

新旧幹事拍手で承認　新任幹事は七人

定時総会の重要議題となっている役員・幹事の選考経緯について、加納安實選考委員長から報告があり、満場の拍手で承認されました。

新役員は次の通り

▽会長　中江　利忠

▽副会長　徳江　景英
同　大野　功雄

▽事務局長　森　精一郎
副事務局長　牧野　詔正

▽幹事
編集　戸引　和夫
別府　次郎
村野　坦
水木　初彦
横田　稲光
業務　大坪　正徳（新）
森下　昇
竹内　實昭
田中右太生
工務　坂井　清保
本多　民明
荒木　忠直（新）
畠山　弘道（新）
名倉　正昌（新）
出版　若目田倫子（新）
中島　泰
諸　寿子
連合　山越　英一
藤巻　隆（新）
奥川　恭子（新）

ご苦労さまでした

崎川　洋光（業務）
込山　光雄（工務）
近藤　行雄（同）
柴　昭二（同）
桜井　孝子（出版）
甚野　隆正（連合）
簗場　敏子（同）

ご苦労さま　選考委員の皆さまです

東京旧友会の役員幹事を選考する大切なお役目を担う選考委員は次の方々です。

◇編集（六）
秋山　康男
天野　重夫
加納　安實（委員長）
黒田　正純
柴田　鉄治
牧野　雄一郎

◇業務（五）
小林　三千夫
久富　道生（新）
都丸　司
長谷川晨（新）
中澤　信男

◇工務（五）
加藤　嘉照
田谷　宣夫
利根澤正弘
星野　富榮
栗原　裟哉

◇出版（三）
宇野　博
岡村　徹
広橋　敏栄

◇連合（三）
大野　出穂
下山　勝
古内　啓毅

「旅の水彩スケッチ展」盛況

趣味の集大成

香月浩之さん

「生涯を一新聞記者として、朝日の誇りを背負ってゆく」というわれらがお手本の旧友会員香月浩之さんが、六月三日から一週間、銀座のギャラリー「うぇすと」で「旅の水彩スケッチ展」＝**写真**＝を開き、社員仲間や旧友で大にぎわいしました。

「朝日新聞は世界に張りめぐらした取材網で、いつまでも社会、民衆の役に立つのが願望」という香月さんは、定年後の趣味として、朝日カルチャーセンターで三ツ山三郎先生（国画会）の教室に通い、なんとその道十五年、スケッチブックを片手にヨーロッパ、トルコ、イランなど旅を楽しんだ。

「スケッチ展」は、その集大成として催したもので「いゃあ、ただ者ではないと思っていたが、これほどまでとは……」「こんないい趣味やってるとは知らなかった。オレもやろうかな」などの声もあった。香月さんはこれからもあすに向かって筆をにぎり続けるという。

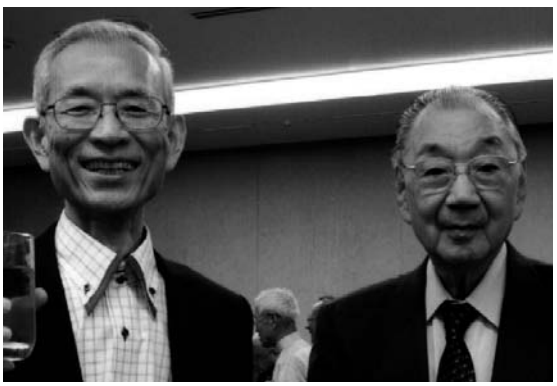
（左）久保田泉さん、木村伊量社長、三浦昭彦さん

（左）三宅勝喜さん、中江利忠旧友会会長、渡辺幸男さん

竹田純さん、牧野信彦さん

稲永金仁さん

高垣徹蔵さん、秋山耿太郎会長



笹井輝雄さん、大倉文雄さん

（左）紺谷安弘さん、大野功雄副会長、村野坦さん

（左）和井田祐三さん、壱岐健志さん、香月浩之さん

田辺功さん、小田川興さん

中江会長を囲んで、元総務の人たち

柴田琇一さん

栗田直次郎さん

島戸一臣さん、村田歓吾さん

（左）長谷川敏郎さん、林信晴さん、石井哲次郎さん

飯野幹雄さん、野地一也さん

平賀義男さん、堀越作治さん

片山朝雄さん、豊田明さん

西井哲郎さん、前原寛成さん

金子満さん、石川喜代司さん

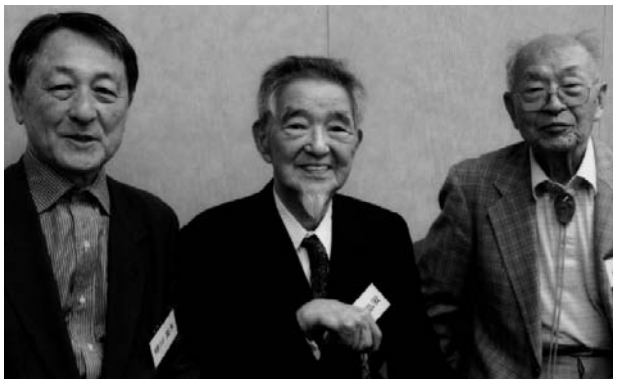
大塚一郎さん、西村誠さん

溝部忠増さん、 児玉浩憲さん

（左）坂井清保さん、秋山会長、寺田達雄さん、水木初彦さん

（左）加納安實さん、下山勝さん、中島善範さん

（左）山本久二男さん、西脇勝さん、中江会長、村岡美佐男さん



（左）蜷川真夫さん、岩井弘安さん、伊藤壯さん

（左）蒲田浩二郎さん、宮田東京代表、東常道さん

川原基尚さん、藤巻隆さん

池田守さん

（左）灰野檀さん、笹井輝雄さん、奥田信久さん、徳江副会長、福井正行さん、三浦義晴さん

若目田倫子さん、諸寿子さん

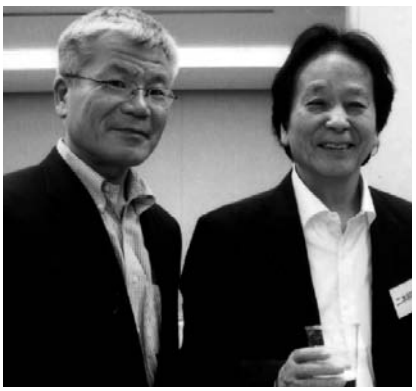
中江会長と元運輸部の人たち

(左)林荘祐さん、後藤監査役、木村社長、安藤保雄さん、宮坂秀一さん

(左)詫摩俊一さん、福田喜大さん、村山朝夫さん

(左)岡村徹さん、中島泰さん、渡辺恒雄さん、伊東鈴男さん

(左)渡邊宏さん、林常蔵さん、中江会長、中野義次正さん、川又健一さん



阪本哲司朝日プリンテック総務・労務担当、二本柳典彦さん

総合サービス取締役荻野俊夫さん、福井正行さん

菊池武さん、徳江景英副会長